

3 研究のまとめ

(1) 成 果

本研究では、中学校美術科において生徒の鑑賞の能力を高めるために、V T Sの理論を取り入れた対話活動を行いました。

「作品の中でどんな出来事が起きているのでしょうか」という発問をすることで、生徒は作品の中でどのようなことが起こりうるかを考えました。「作品のどこからそう思いましたか」という発問を通し、作品のどこを見てそう感じたのか考え、対話活動でお互いの見ている場所を共有することができ、作品を注意深く細部まで見るように変わっていきました。また、「なぜ、そう思いましたか？」の発問で、生徒は自分の考えや感じ方がなぜ生まれたのかを考えることができました。「どのように見ていいのかわからない」と答えた生徒も、生活体験（日常生活）に基づいた見方をしてもよいことを知り、自信をもって自由に発言できるようになりました。さらに、作品を見る行為に対して対話活動を取り入れたことにより、自分の経験や知識ばかりでなく、グループ内で批評し合いながら知識や経験を共有することで、生徒はより具体的な場面を重ねて見るできるようになりました。作品に対して新しいイメージをもたせることができたと考えます。「もっと発見はありませんか」という発問では、日常生活の経験を基に考えることで、作品には描かれていない背景、更には作者の意図に迫らせることができました。

このような生徒の変容が見られたことから、V T Sの理論を取り入れた対話活動を行うことで、見方や感じ方について根拠を考えることにつながったと考えられます。

(2) 課 題

鑑賞の授業を行う前に、作品の選定、生徒の実態把握、それらを使った事前準備の必要性を感じました。

V T Sの理論を取り入れた対話活動は、鑑賞の入り口だと考えます。しかし、「この作品が好きか、嫌いか」の感情論から入る鑑賞の授業になるとその入り口を誤ってしまう恐れがあると感じます。生徒が美術作品を楽しく見るために今回の鑑賞活動を継続し、新しい作品に出会ったときに、「どんな出来事が起きていますか？」と自分に問いながら作品を見る姿を期待します。そうすることで、生徒が新しい自分を発見できるようになればと考えます。